

## 第七走者『こと』

現代日本語で文章を書こうとすると、どうしても形式名詞の「こと」と「もの」が多くなってしまう。ちよつと調べてみたら、これは現代日本語に限らず、平安時代日本語においても同様らしく、あの源氏物語の全単語中最も多く用いられているのは「こと」だそうである。ちなみに「もの」は第九位、そしてついでに知ったかぶらせていただと、枕草子では「もの」が六位、「こと」が七位だそうだ。とにかく、今も昔も「こと」と「もの」抜きで文章を書くのは難しいということだ。…と、ここで「こと」が登場してしまった。気をつけていたのだが。今回は厄介なことにその「こと」をテーマにして書かなければならないので、混乱を避けるため、文章表現上の「こと」とトピックの「こと」を区別するために、後者を「コト」と表記する。「モノ」も同様。では、まずとある会話から…。

おい、そこでワープロを打っている者よ。そちは古事記様に

ついてどのようなことを知っておるか。

はい。たしか、日本最古の文学で、えくと、（ナイフを突きつけられて、オーノー、ヒエーだから…）七一二年に成立し、オオノヤスマロ：ヒエダノアレ：アレ（実は漢字もわからない…）アレ、どっちだっけな。えくとどっちかが喋ったのをどっちかが書き取ったんでしたっけ。

お前は文学部国文学科を卒業したのではなかったか。これはゆゆしき事態である。全ての国文学のさきがけたる古事記様について、そのようないい加減な認識しかないとは。憂慮すべきことである。甚だ遺憾である。

ちよつと待つてください。私にも少しく弁解の暇を頂きたい。私は小学校においても、中学校においても、高等学校においても、大学においても、その古事記様の内容についてご教示いただいた記憶がござりませぬ。

えーい、嘘を申せ。

…あつ、そう言えば、幼稚園で見た紙芝居、あのヤマタのオロチとイナバのシロウサギのお話は古事記の一部でしたっけ。

…という具合に、私をはじめ、古事記についてあまりよく知らないという不届き者が、この国にはとても多いようである。古事記について詳しい人というのは、現代においては、かなり御高齢の方か、かなり国文学についてマニアックな方か、かなり右寄りの方かに限られるのではないか。いったいどんな理由があつてこのような憂慮すべき事態になっているのだろう。戦前の皇国史観教育への反省：それもあるだろう。しかし、それ以上に、そのエロティックで非論理的内容が現代の教育にふさわしくないと理由の方が、ことの真相を突いているように私には思われる。科学万能主義、論理性優先主義の現教育には、たしかに古事記はなじまない。

私も大学卒業までは全くの不勉強であつた。しかし、ある事情によつて、ほんの少しであるが、原文に当たつて読む機会を得た。ナイシヨの話だが、実は私は、私の住んでいる富士北麓に伝承するある文献の研究をライフワークの一つにしている。その内容はおそろしく膨大で、おそろしく多岐にわたり、おそ

ろしくドラステイックなものである。だいたい、日本最古として疑われることのない古事記・日本書紀よりさかのぼること千年前に書かれたものが含まれると言われるのだから、荒唐無稽である。もちろんアカデミックの認めるところではない。ナイショにしておかねばバカにされてしまう。たしかにその体裁にも内容にも問題が多いのだが、それ以上に壮大な「ドラマ」としての魅力に大いに惹かれた。敗者の歴史として読むと、どこか哀愁さえ感じられて、判官鼻肩をあえてしてみたくなる。そんな代物だ。で、その文献の味方をすることにしたのだが、そうしたいわばマイナーなものがメジャーなものに食らいつく際には、まずその強大な相手を研究する、というのが常道である。そうしないと、作戦の立てようもないというものだ。だから、メジャーである古事記を読むはめになった。はめと言っではない。遅ればせながら、読ませていただくこととなった。そして、読んでみてすぐにびつくりした。マイナーよりもつとヤバイ内容ではないか。私のような下賤の者には到底理解できないと思った。まるで夢の中の出来事のように自由であった。

その新鮮な刺激が、私には結構快感であった。相手もなかなかやるな。これは一筋縄ではいかないぞ…。

ん？待てよ…。

突然、今の感覚とある記憶との間に大きなズレが生じて、妙に胸の座りが悪くなった。

古事記という、その名前に一つの疑問が沸き上がったのである。

古事記…とにかく日本最古の典籍だと教科書に載っている。

それもこの日の本の国がいかにして生まれ、天皇制がいかにして今に続くかを明らかにする重要文献である。色々な異論があるのは分かっているが、とりあえず重要文献であることは間違いない。文字がない（と言われる）時代に、無理やり異国の文字を借用して、非常に読みにくい文体で書いた。それも天皇の命令だ。これは、相当の決意だ。日本文学史年代暗記のトップを飾るにふさわしい。そして、自由である。出口王仁三郎の靈界物語ほどではないにしても、聖書やギリシャ神話には充分対

抗しうる。そんなすごいものとはつゆ知らず、中学生の頃は「乞食」みたいで変な響きの題名だなと思っていた。これはいかん、シャレにもならない。高校生になると、私も少しは大人になった。国語便覧というものを学校から与えられ、それを数学や英語の時間に読んだ。古事記：いにしえの事を記したところから命名された。そう書いてある。なるほど、分かりやすい。そこで思考は停止した。それが私の疑いのない記憶として残っていたのだ。しかし、実際の内容はそんな記憶をはるかに低く見下ろしながら、私の頭上を自由に旋回している。こいつは何かある。本居宣長に従えば、「コジキ」ではなく、「フルコトブミ」と読むわけだが、神様や天皇様のことを書いたものなのだから、ただ「古い事を記した」ものと理解するのも何か軽々しいような気がする。「フル」と「フミ」はまあ一般的な解釈でいいとして、真ん中の「コト」には何か我々が考えている以上に深い、というか重い意味が含まれているのではないか。私の悪い癖がまた顔をのぞかせた。私は疑い深い上にアマノジャク気質で、さらに思い込みが激しいのである。

とにかくフルコトブミの冒頭をもう一度読んでみた。序の部分は別として、最初に「コト」が出てくるのはどこか、と思つて眺めていたら、まず「モノ」が目についた。ああ、「コト」より「モノ」が先か……。次に国稚く浮脂の如くにして、久羅下那州多陀用幣琉時、葦茅の如、萌騰る物に因りて成りませる神の名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神……」というところである。カオスを脂とかクラゲとかで表現するところがなんとも可愛いが、とりあえず、この世がドロドロで形をなしていない時のお話である。なんとなく実体がかめず、ぼんやりした感じである。そういえば、「もののけ」や「もの思ひ」の「モノ」にもどこかぼんやりした、つかみどころのないイメージがある。平安時代あたりには「ものす」という動詞も好んで使われたが、これは一種の婉曲法であり、直接的表現を避けたものである。これもやはりぼんやりしている。あの兼好法師の「ものぐるほし」というのも、「なんだか分からんが、気が狂いそうになる」というニュアンスである。

いやいや、今は「モノ」にこだわっている場合ではない。「コト」を探さねば…。

出てきた、出てきた、いろんなのがいつぺんに出てきた。イザナキとイザナミの結婚から国生み神生みのあたりである。そこに三種類の「コト」が出てきた。一つは「命（みこと）」に含まれている「コト」、二つ目は「言依せ」「言立ち」の「コト」、そして三つ目は「大事忍男神」の「コト」だ。

このシーンではまず、イザナキ、イザナミ両「みコト」が「コトよせ」を賜る。一般には「言依せ」とは「依頼・委任」と解されている。しかし、そういった常識も少し疑ってかかってみると、「言依せ」の「言」はどこに行ってしまったのか、「依せ」だけでも「依頼」の意味になるではないか、ということになり、さらには「く依せ」と言えば、「く」を依頼するの意味に違いないではないか、などという新しい考えもわく。じゃあ、その「く」とは何か。それはまさにこの後、イザナキ、イザナミ両神が依頼に従って執り行った内容である。だから、それはいったい何なのか。はいはい、ちよつと復習しましょう。

「言依せ」を賜った両神は、授かった天の沼矛でカオスをコロコロとかき混ぜる。その矛を引き抜いたところ、矛先にくつついていた雫が落ちて固まってオノコロ島ができる。オノコロ島は自然と凝り固まったのでオノコロなんだという。その後、その島を拠点に両神は国やら神やらをたくさん生み出す。そして最後に「大事忍男神（おおコトおしをのかみ）」を生むのである。これで「依せ」られた「言」は一件落着、ということになる：つまりは、「コト」はドロドロな「モノ」を固めてコチコチにすることではないのか、つまり修理固成を表す言葉ではないのか。

だいたい、それまで「イザナキ神」とか「イザナミ神」と書かれていたのが、このシーンから突然「イザナキ命」「イザナミ命」に変わるではないか。大仕事を託されて、ちゃんと実行したのだから「みコト」と敬称を賜ってしかるべきなのである。よく統べ領めた人を「よつ大統領！」と言うのと一緒である。その辺を稗田阿礼か太安万侶がよく分からないが、どっちかがはつきり意識したのだった。

こうして考えていると、「モノ」から連想されるのは「素材」  
「自然」「未加工」「漠然」、「コト」から連想されるのは  
「完成品」「人為」「加工」「判然」。言い換えれば、「モノ」  
はまだ我々の知覚に捕らえられていない、あるいは手が加えら  
れていない感じがする。一方「コト」は我々が捕らえた、手を  
つけたという感じだ。「モノ」をある力でこちらに引き寄せる。  
認識する。そして、結果「コト」になる。それこそまだまだ漠  
然とではあるが、そんなイメージが沸いた。神話が伝えるモノ  
がほんの少し自分の中のコトになる。

調子が出てきたところで、もう少し歩を進めよう。

「ことば」が昔「言の葉」と呼ばれていたことはよく知られ  
ている。「言」は「事」に通じる、そして、「葉」は「齒」や  
「端」と同源で、何かの先端部分、あるいは辺縁部分のこと、  
つまり、「言の葉」とは事物の表面というか、最前面に貼られ  
たラベルなのだという説がある。私もこれを知ってなるほどと  
思った。しかし、いかに名は体を表すとは言っても、ラベルに  
しては「ことば」が持つ力があまりに強大なのに、少し違和感

を持ったのも事実だった。では、こう考えたらどうか。「は」とは、たしかに何かの先端部分であるが、それはちよつとした一部分という意味ではなく、最前線という意味なのではないか。「ことば」は修理固成の最前線、つまり「実現」の端緒、「実現」の前提条件と言えるのではないか。先ほど「モノ」をある力で「コト」にする、というようなことを言ったが、「ことば」こそ、その力の正体のようにも思えてくる。

「コトたま」も普通「言霊」と書かれて誰も疑わず、「ことば」が持っている不思議な力などと説明されて皆納得しているのだが、本当にそれでいいのか。もつと単純に「修理固成のエネルギー」と捉えたらどうだろう。だから、「敷島の日本の国は言霊幸はふ国ぞ」とは「日本は実現（願望成就）のエネルギーに満ちているラッキーな国、まあ何でも叶っちゃうすごい国だよ、まったく」という意味のような気がするのだがいかに。ちなみに万葉集では「事霊」と表記されており、「言霊」と書いて「言葉の力」に固執するのは、平安以降のこのようだ。もちろんその傾向は江戸時代の国学者たちの努力によって顕著に

なつてしまった。

とは言つても、人間は「ことば」によつて思考するのであり、書いたり、喋つたりしてハッキリした、ということは誰でも経験する（事実今、私はそれを体験している）。「モノ」を「コト」にしたいと思うのは人間の本能であり、そのために「ことば」という道具が発明されたとも言える。そして、古来日本では「ことば」を神格化し、恐れ崇め奉つた。恋愛の成就も、怨敵の調伏も「ことば」に託されたのである。そんなわけで、「コト」が「ことば」と強く結びついていくというのも納得の行くところである。

さて、現代語でも「モノ」と「コト」は対照概念だと言われている。辞書を引くと、前者が具体的な概念、後者が抽象的な概念を表す、と書かれている。はて、「モノ」はボンヤリ、「コト」はハッキリ、という先のイメージとは逆ではないか：と一瞬戸惑う。しかし、よく考えてみると、全く矛盾がないことがわかる。つまり、「モノ」は物質としてはすでにそこにあるわけで、人間がいようがいまいがその存在には関係ない。そ

れを人間が知覚を通して「コト」に変換する。「コト」はあくまで人間の思考と感覚の中に存在するのだという原点に立てば、「モノ」が具象で「コト」が抽象として何ら問題ないということだ。ドロドロをコチコチにするとは、物理的な現象ではなく、あくまで人間（や神）の意識の中に固定したイメージをつくるということだ。少し哲学的になつて無理やりまとめてしまえば、「モノ」∥「具象・実在」、「コト」∥「抽象・観念」という構図が成り立つのである。さらにそこから唯物論、唯心論にまで発展させることも可能だが、それはまた後日としよう。

ところで、冒頭、源氏物語には「コト」が多く、枕草子には「モノ」が多いと書いた。この事實は、源氏はどちらかという主観的な文学であり、枕はどちらかというと客観的な文学であるという定説を、見事に証明している。

ついでに今思いついたことを一つ。「こたふ」という言葉、もとは「コト合ふ」だったと想像されるのだが、これも古い使われ方を見ると、「返事をする」というような意味より、「神仏がこちらの願いを聞いてくれて、ものごとを実現してくれる」

という意味で用いられていることが多い。願いという素材や原因と、実現という完成品や結果とが合致したという現象を言いたいわけで、それがオリジナルな意味であった。後に「コト」は「言葉」という意識が強まるにつれ、「いらふ（返事をする）」の意味で「こたふ」が使われるようになる。「ことあげ」「ことほき」「ことわく」：このように考えていくと、古語辞典の項目に並んでいる中でも上代の例を引いたものは、全く違った解釈が可能であることに気づく。

さて、この第七走者はかなりの長距離を走ったようである。それもかなり険阻な山道を上ったり下ったりした。それこそ紆余曲折を経て、ここまでようやくたどりついた。さあ、そろそろ次の走者にタスキを渡したい。今までの道のりを振り返りつつ、最後のスパートをかけよう。

「コト」は「修理固成」「実現」「概念化」を表す言葉である。だから、「古事記」とは「昔むかし、神様がドロドロを固

めて地球やら動物やら植物やらを作ってくれたことを忘れないように記しておくか」という「創世記」なのであった。そういう目で見ると、古事記の内容もまた違った新しさというものを我々に提供してくれるような気がする。これは日本人の歴史観にも一石を投じるけっこう重い新しさだと思ふのだがどうだろうか。

言葉の活動によつて、それぞれの人間の中にそれぞれの宇宙が創造されていく。それらが言葉という共通のイメージでつながる。時代とともに、それぞれの宇宙は無数に増えつづけるのだが、同時にどこかに収束していく。そんな様子が想像される。人間と言葉と宇宙の関係とは、かくも不思議なものであったか。こうして長々しく書いてきた結果、つまり多くの言葉たちの活動のおかげで、私の頭の中でも多くの「モノ」が「コト」に変換されたことは確かである。それが生きていく、考える快感である。さまざまな経験と思索を経て、いかにこの快感を得るか。人生の豊かさとは、「コト」をどれだけ自分の中に持っている

かで測れるような気もする。がしかし、言葉に出したとき明瞭化する「コト」の不思議とともに、その一方で言葉に出しても明瞭化しない「モノ」の不思議も味わった、その事実も忘れてはなるまい。そういうように歴史はできているような気がする。思うように行ったり行かなかつたり…。近代、人間は恐るべき傲慢さで「モノ」の「コト」化を進めた。「コト」を得る快感に溺れ、「モノ」の価値をあえて無視した。その結果が今の世界である。そんなに人間の頭で思うようにばかり「コト」は進まないと思うのだが…。

第七走者はなかなか意気軒昂で、まだまだ「モノコト論」を発展させる余力を残しているようだが、なにしろこれは駅伝だ。もう次の走者がそこに待っている。彼にはいつか単独で走ってもらおうとしよう。では、**とりあえず**ご苦労さん。